

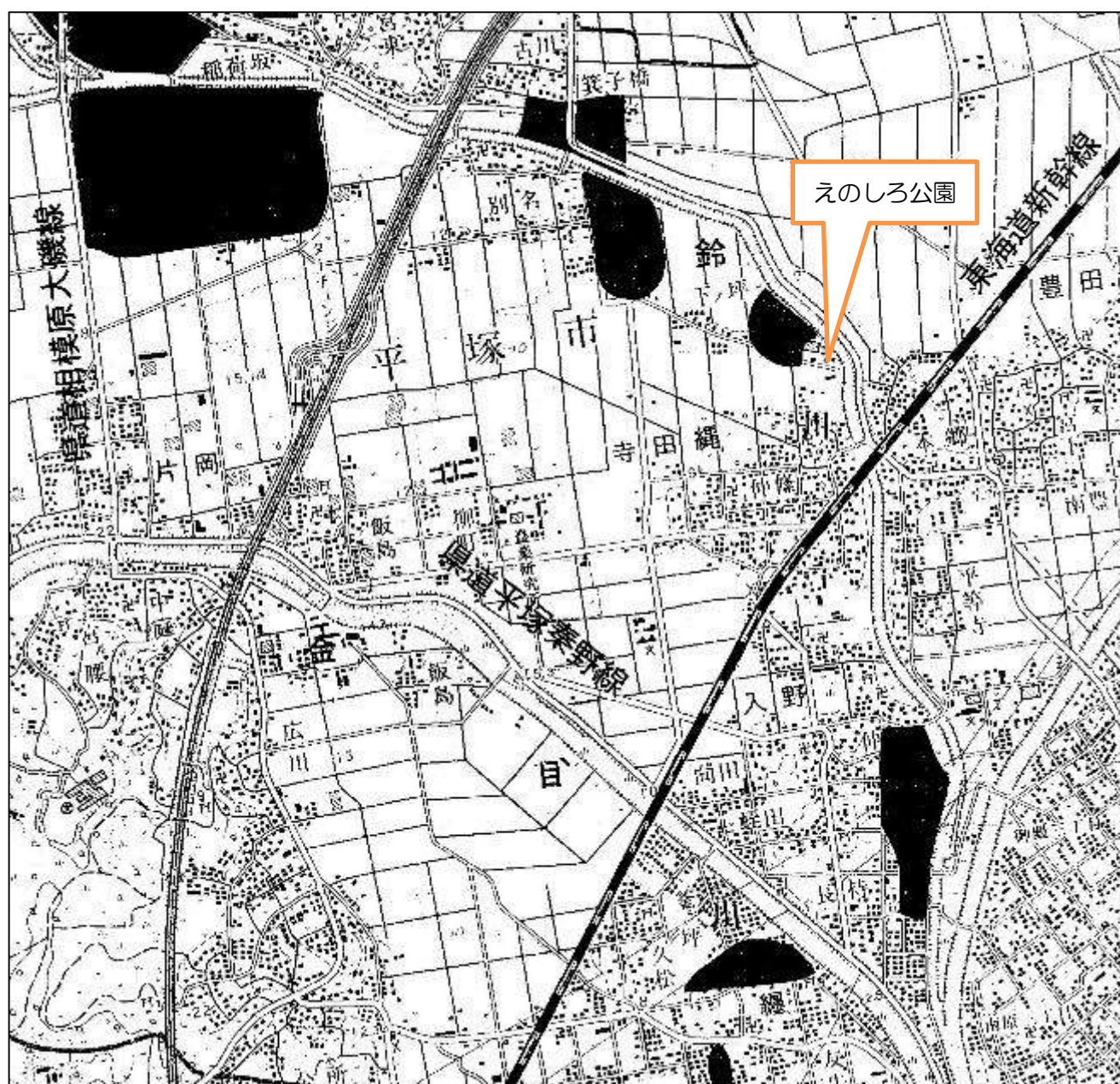
地域の災害を考える (6)

金目川流域浸水実績図

寺田縄地域は金目川が作った扇状地性の地形の上にあります。地盤は微少ながら年々沈降・沈下しています。直近の10年間は約5cm、その前の10年間は約4cmと沈降のスピードが速くなっていると云えます。近年、堤防決壊の被害はなくとも、豪雨による道路の冠水等のニュースが伝えられています。

深刻な例として、**地域の災害を考える (3)**で昭和13年9月の台風による金目川の氾濫被害状況を当時の新聞記事で紹介いたしました。

平塚市下水道部業務課が、昭和54年(1979)10月19日 台風20号による平塚市内の浸水域を地図で示しました。金田地区の状況は図示の通りです。



■ 黒塗りの個所が台風により浸水した地域を示しています。

昭和54年10月、日本列島に襲来した台風20号による豪雨と暴風は金目川水系の各所で溢水・氾濫し、多くの被害をもたらしました。

地図上から、金田地区は2か所の浸水域が黒く塗られ確認されます。

1、寺田縄地域の浸水域は、えのしろ公園北側の地域でした。

2、長持地域の浸水域は、鈴川沿いに黒く塗られた地域があります。

字名では「古屋敷」、「根下」という地域です。

「古屋敷」は『昔、村はこの古屋敷にあったと伝えている。鈴川の水が氾濫するので、土地の高い西の方に移ったそうである。約300年昔のことと伝えている。浄信寺も鎮守の熊野神社も移ったそうである』（平塚市民俗調査報告書4 金目・金田）と記されているように、昔から水による被害を受けやすかった地域でした。

■ 台風20号は紀伊半島から本州を縦断し、その被害は神奈川県のみならず、日本各地に多大な影響をもたらしました。

平塚市が発行した地図の説明文をⅠ、Ⅱとして示します。

Ⅰ、金目川における過去の出水状況

金目川は昭和30年代以降流域の開発が進んだこともあり、水害に見舞われています。このうち、昭和54年10月19日の台風20号による水害は、まだ記憶に新しいものです。

最低中心気圧870mb、最大風速70m/sceの大型で強い台風であり、昭和51年県下に被害をもたらした台風17号よりも大型でした、県下では18日9時頃から雨が降り始め、19日4時頃から断続的に強まり時間雨量が10mmを越え、9時には強さは本格的となり、時間雨量10～70mmの雨が14時頃まで降り続けました。このため、**金目川水系の各所において溢水氾濫し、被害をもたらしました。なお、金目川水系における降雨は秦野で40mm/hr、平塚で27mm/hr、伊勢原で19mm/hrを、記録しました。**

Ⅱ、浸水実績図について

金目川流域では戦後において数回の浸水が起こっていますが、この図は、**浸水域が大きかった昭和54年10月19日降雨（台風20号）の浸水実績を基に作成したものです。**

流域の皆様には過去に浸水した地域を知っていただくことにより、適正な土地利用や緊急時の水防避難等に役立てていただくようお願いいたします。

なお、浸水の地域は雨の降り方や土地形状の変化などにより変わることがあります。

との説明文に、台風の勢力、降水量などに加え、市民の注意喚起が記されています。

◆ 台風20号を伝える、10月20日神奈川新聞の記事です。



台風20号、『列島総なめ』の見出しが、日本への多大な影響を物語っています。

■ 記事には『和歌山県白浜に上陸後も大型で強い勢力を保ったまま、奈良県南部から・盛岡南東部へと日本列島太平洋岸から日本海岸までを厚い雨雲と強風の渦にすっぽりと包みこんで駆け抜けた。』

10月台風としては珍しい本格的な台風で、豪雨と暴風で各地に死者などの被害が続出した。関東南部も13年ぶりの大型台風の暴風雨域に包まれた。20号の広大な暴風雨域は・・最後までエネルギーは衰えなかった』

『気象庁の分析によると、20号は太平洋上でエネルギーを温存して一気に上陸したため最後まで勢力が衰えなかった。9月30日の16号台風と同様「本州縦貫、勢力不変」がこと

しの台風の特徴で、上陸台風はことし三つ目。同庁は「20号は最後まで時速70kmから95kmの猛スピードを保持していた。これが衰えなかった最大の原因で被害が広がった」としている』

■ 県下は死者・不明4人

神奈川県は19日『午後2時半に県対策本部（本部長長洲知事）を設置、被害状況を掌握すると同時に警戒に当たった』、『県が対策本部を設けたのは、51年9月9日の台風17号以来3年ぶり』

『相模川水系は上流の相模ダムが満水面に達したため、18日午後6時半から・・放流しており、19日午後には毎秒1900t～2000tに増やし調整した。酒匂川水系も三保ダムが放流を始め19日午後のピーク時には毎秒1000tに増やした。ダム調整のため放流するのはここ2～3年なく、しかも大量の放流になったため被害が心配されたが、放流による直接の被害はなかった』

『水防本部がまとめた被害状況（午後6時現在）によると、・・秦野市内の水無川、四十八瀬川、金目川・・が決壊した』

韋駄天 県下を強襲



箱根小涌谷で瞬間最大風速65メートルを記録した。この台風の勢いは気圧が976.9mbで昭和33年の狩野川台風以来21年ぶりの威力・・・電車も夕方まで完全ストップ、15万世帯が停電した

瞬間65メートルを記録

死者不明4人 足は半日全面マ

【本報記者】 台風20号「イダテン」が、20日午前10時頃、箱根小涌谷を通過し、県下を強襲した。瞬間最大風速65メートルを記録した。この台風の勢いは気圧が976.9mbで昭和33年の狩野川台風以来21年ぶりの威力・・・電車も夕方まで完全ストップ、15万世帯が停電した



水浸しの街路

【本報記者】 台風20号「イダテン」が、20日午前10時頃、箱根小涌谷を通過し、県下を強襲した。瞬間最大風速65メートルを記録した。この台風の勢いは気圧が976.9mbで昭和33年の狩野川台風以来21年ぶりの威力・・・電車も夕方まで完全ストップ、15万世帯が停電した

家路は

銘木

■ 『イダテン（韋駄天）の台風20号が19日県下を駆け抜けた。箱根小涌谷で瞬間最大風速65m（同2時半小涌谷駅調べ）を記録した。横浜地方気象台では、この台風の勢いは気圧が976.9mbで昭和33年の狩野川台風以来21年ぶりの威力・・・電車も夕方まで完全ストップ、15万世帯が停電した』

■ 各地で生々しいツメ跡
『大型台風が過ぎ去った地方では、街路樹が倒れ川の増水で県道が崩れるなど各地で被害が出た。平塚では老人が飛んできた屋根の下敷きになるなって死亡、・・・各市町村で災害対策本部を設置して警戒、住民に注意を呼びかけた。・・・特に強風による家屋の損壊が続出、トタン等の飛来によるけが人も出たほか、農作物にも大きな打撃を与えた』

県内の惨状を伝える記事です。



◆ 昭和54年台風の3年前、51年9月9日の台風17号でも被害を受けました。

昭和51年に発生した台風第17号は、全国的に記録的な降水をもたらしました。9日に南西諸島を通過した後、10日から12日朝にかけて九州の南西海上でほとんど停滞を続け、12日午前になり北上を始め、13日午前、長崎市付近に上陸、午後になり日本海へ進み温帯低気圧になりました。

台風は長期間日本付近にあって、前線が四国から関東付近に停滞したこともあって、関東地方もその影響を受け降水量がはなはだしく増大しました。神奈川県では行方不明者を出すなど、河川の氾濫・堤防の決壊等を含め大きな被害を受けました。

◆ 神奈川新聞の記事を紹介いたします。



■ 県下で死者不明3人

台風17号集中豪雨

『県警を始め県、各自治体に災害対策本部を設置。厚木の陸上自衛隊、横須賀の海上自衛隊から災害救助隊が派遣された。 台風の進路によっては今後も県内で100～200mmの雨量が予想されることから県警などではさらに厳戒体制を続ける一方、自治体なども警戒を強めている』



■ 県央も豪雨大被害

平塚市内

8日夜6時から9日午後1時まで
に124mm（県農総研調べ）の降水量
を記録した。このため床上浸水や道路
冠水が市内の各所に出たほか、浸水の
ため市内にある加入電話のうち半数
近くが故障するなど、大雨による被害
が続出した。このため追分交差点近く
の平塚共済病院前に臨時公衆電話十
基を開設した。

また、道路冠水は市内のいたるところ
で発生した。特に、同市浅間町の市
道後谷八幡裏線やこれに通ずる国道
129号は一時4、50cmも水かさか
上がり、さながら“川”の状態。通る
車も故障が続出するなど、渋滞をきた
した。

大磯署管内でも床下浸水50戸が
あった。

.....

電話も市内中里の中里電話交換局
の電力室に入った水のため、同市内の

約25000回線が不通となった』

平塚市下水道部業務課が作成した、昭和54年（1979）台風20号による平塚市内の浸水域の地図をもとに、その年と3年前の昭和51年の台風17号の新聞記事を記しました。

この両年だけではありませんが、金田地区にあって洪水を体験しその被害を実際に受けた方々の体験談を『地域の災害を考える（3）』で紹介しています。

<結語>

金田地区・寺田縄地域は金目川水系に位置し、金目川・鈴川の両河川に挟まれた河成平野にあります。両河川の自然の営力によって平野が形成されました。今、私たちが暮らしているこの地域の両河川には堤防が築かれていますが、新聞記事にあるような台風・豪雨等により堤防の決壊・洪水などの被害が起きています。鬼怒川の堤防が決壊し多大な被害が生じたことは記憶に新しいことです。また、近年の局地的豪雨も加えねばなりません。それらを、「想定外」として片づけることはできません。

私たちの大地が「扇状地性」の地形であることは紹介しました。「扇状地性」の地形が形成されるには、金目川や鈴川の流れが、土砂を侵食し、運搬し、この地でいくすじかの流れにより土砂の堆積を続けてきたことにより、今日ある地形の基本形を作りました。この地では河川が自由奔放に流れていたと思われます。この流れの傾向が「扇状地性」の地形を作りました。流れが固定されない自然の流れに任せては、農業を営む田畑はできません。居住地を定めることも困難です。

人は人為的に河川をコントロールして洪水からの安全を獲得し、土地を利用してきた歴史があります。人は自然条件を克服して農業生産を高めてきました。人の集まりである集落を作りました。人の活動が人間社会を作り上げています。

人には人の歴史があり、自然にも自然の歴史があります。金目川の洪水の歴史を考えると、「十年に一度の割合で洪水に見舞われた」との事実は深い重みをもって私たちに迫ります。地域・人の活動は金目川・鈴川との戦いでした。その結果、人は金目川・鈴川をコントロールできたのでしょうか？ 人は自然を改変し有効な手段を取ったと考えても、自然は自然の歴史に根ざす働きをします。人為的に川の流れを変えても、自然の営力は元の流れに戻る力が働くこと、多くの例が示しています。

河成平野に住む我々はこの自然の営力を忘れてはならないと思います。特に川に起因する自然災害に絶えず注意することを怠ってはならないと思います。



(撮影 2013. 9. 15)



(2014. 10. 6)

増水した鈴川の写真です。14年は平塚周辺を襲った局地的豪雨でした。いつもの鈴川は中州ができ、野鳥が羽を休める風景が見られています。しかし迫りくる水量に恐怖を覚えます。少し下流の東橋付近、右岸側の土手が水流で削られたこともありました。